

## ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』研究（二）

中 澤 務

前号（65-1）では、ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』が、いかなる文書であるのかを明らかにするとともに、この文書が受けている思想的影響について詳しく考察した。

その結果、この文書は、紀元前400年前後に、ソフィストの影響を受けた何者かによって執筆され、主として弁論術の教育のために使われた文書であり、著者は、紀元前五世紀における多様な思潮の影響を複層的に受けていることが明らかとなった。

前号で述べたように、この文書は、思想的にはなんら目新しい内容を含んでいないと考えられてきた。しかし、そこで述べられている相対主義や言語をめぐる考察は、当時の思想家の考察には見られない斬新な論点が登場しており、この文書は、哲学的オリジナリティを有している。今号では、この点を中心に考察していきたい。

4.では、この文書の前半部分で論じられる相対主義の思想を詳細に分析し、その思想がたんなるプロタゴラスの焼き直しではなく、新しい視点を提示したものであることを明らかにする。続く5.では、この文書の4章において論じられている言葉と真理をめぐる議論を取り上げ、そこでの考察が、紀元前五世紀にはない新しい論点を提示していることを明らかにする。最後に、6.では、考察をまとめ、この文書がもつ思想的・歴史的重要性を指摘したい。

## 4. 『ディッソイ・ロゴイ』と相対主義思想

### 4.1 対立テーゼをめぐる考察

この文書の1～4章では、よいことと悪いこと、美しいことと醜いこと、正しいことと不正なこと、真なる言明と偽なる言明という対立項をめぐる、対立的なテーゼが提示されている。まずは、この対立するそれぞれのテーゼの特徴を分析し、その内実を明確にしておくことが重要であろう。

二つのテーゼは、二つの対立項について、一方は両者が同一であると主張し、他方は両者が異なると主張している。ここでは、前者を「Iテーゼ」、後者を「Dテーゼ」と呼ぶことにする。まずは、これらのテーゼの定式化から始めることにしよう。

Iテーゼがもっとも詳細に提示されているのは、1章である。そこでまず、1章での規定を詳しく分析しよう。1章では、Iテーゼは、次のように提示されている。

それら（よいことと悪いこと）は同一であり、ある人たちにとってはよいが、ある人たちにとっては悪く、また、同一の人間にとっても、あるときにはよいが、あるときには悪い。(1.1)

この説明の中には、以下の三つの主張を読みとることができる。

- ①よいことと悪いことは同一である。
- ②同一のことが、ある人たちにとってはよいが、ある人たちにとっては悪い。
- ③同一のことが、同一の人間にとって、あるときにはよいが、あるときには悪い。

①は、よいことと悪いことの同一性を、端的に主張している<sup>1)</sup>。だが、①で述べられている、「よいこと」「悪いこと」という二つの「ものごと<sup>2)</sup>」の同一性が、具体的にどのような事態を意味しているかは、この表現だけではあいま

いである。それゆえ、著者は、それを②の表現に言い換えることによって、より明瞭にしているのだと考えられる。

われわれは、①と②の間に、大きな違いがあることに注意する必要がある。①では、二つの項の端的な同一性が主張されている。ところが、②では、二つの項は述語として表現され、それが同一の主語に対して述定されるかたちになっているのである。さらに、②では、これらの述語のそれぞれに、「ある人たちにとって」という限定句が付されており、この限定句の相違に応じて、付帯する述語が変化している。たとえば、病気の例でいえば、限定句が「病人にとって」であれば「悪い」が付帯し、「医者にとって」であれば「よい」が付帯することになる。

この構造は、③においても基本的に変わらない。③は、②がさらに限定されたケースであり、②の二つの限定のそれぞれに、さらに限定を付けることによって、付帯する述語がさらに変化することが主張されている。著者は具体例を述べていないが、「死は、死ぬ人にとって、通常は、悪いものだが、激しい苦痛にあえいでいるときには、よいものである」といった例を考えればよいであろう。その意味で、③は、限定句が入れ子構造を取りうることを示したものであり、その基本的な構造は、②と変わらないのだと考えられる。それゆえ、③は②と同じものとみなすことにしよう。(じっさい、2章以降では、③に相当する規定は省略されている。)すると、②③において述べられている同一性の主張とは、「同一の主語Sに、「～にとって」等の限定句に対応して、対立する述語Pが付帯する」という主張であることになる。

このように、①における、対立的なものごとの同一性の主張は、②③における表現に言い換えられ、再解釈されている。このことは、2章と3章において、Iテーゼが定式化される時、登場するのは②の表現であり、①は省略されていることからわかる。じっさい、1～4章において提示される、Iテーゼを支持する具体的な議論においては、すべて②の表現において具体例が列挙されている。

以上から、Iテーゼは、次のように定式化できるであろう。

I テーゼ：同一のものごと S は、限定 L のもとでは P であり、限定 L' のもとでは anti-P である。

つぎに、D テーゼの考察に移ることにしよう。D テーゼの定式化は、各章の冒頭に登場するほか、1, 3, 4 章においては、D テーゼの議論が始まるさいに、改めて説明されている。D テーゼについては、各章の表現は共通しているので、1 章に登場する表現のみを挙げておこう。

よいことと悪いことは異なり、名前が異なるように、実質も異なる。(1.11)

この定式化に登場する「よいこと」と「悪いこと」は、I テーゼと同様の「ものごと」であり、両者は、名前だけでなく、実質 ( $\pi\rho\acute{\alpha}\gamma\mu\alpha$ ) (あるいは、2.1では「実体 ( $\sigma\omega\mu\alpha$ )」) も異なるとされている。名前が異なるというのは、音声の形(「アガトン」と「カコン」)が異なるということであろう。著者は、音声における形式的な相違だけでなく、それ以上の実質的な相違があるのだと主張しているように思われる。

D テーゼで提示される定式化では、I テーゼとは異なり、具体的な定式化が登場しない。しかし、じっさいのD テーゼ擁護の議論を見ると、著者は、I テーゼと同様の具体的な定式化を念頭にしていることがわかる。著者の提示する次の具体例を見てみよう。

(i) 両親によいことをしたら、悪いことをしたことになる。(1.12)

(ii) ある男が美しいなら、彼は醜い。(2.21)

いずれにおいても、問題になっているのは、主語 S に対する対立的な述語の付帯である。主語となるのは、(i)では「両親に対するふるまい」であり、(ii)では「ある男」である。この主語に対して、対立的な述語が付帯しうるか否かが問題となり、この場合には、それが否定されている。すなわち、D テーゼで

は、「同一のものごとSが、Pであるなら、anti-Pである」という事態が、不合理なこととして否定されていることになる。これは、Iテーゼの構造に合わせるなら、次のように書き換えることができるだろう。

Dテーゼ：同一のものごとSが、Pかつanti-Pであることは、不可能である。

Iテーゼと比較すると、Dテーゼでは、限定LとL'が除去されることによって、Pとanti-Pが、同一の主語Sに対して、なんの限定もなしに付帯するという事態が想定され、それが否定されていることになる。

以上をまとめよう。IテーゼとDテーゼの対立点は、「二つの対立的なものごとが、同一なのか異なるのか」という点にあったが、著者はそれを、「同一の主語に対して、対立的述語を付帯させることができるのか、できないのか」という問題に再解釈したうえで、考察している。これによって、Iテーゼは、「限定句を導入した場合に、同一の主語に、対立的な述語が付帯しうる」というテーゼに再解釈され、Dテーゼは、「限定句を導入しない場合に、同一の主語に、対立的な述語が付帯しえない」というテーゼに再解釈されている。

著者は、両テーゼの内容をより明確に定式化することによって、当時の論争において曖昧であったIテーゼとDテーゼの対立の内実を明らかにしたうえで、問題を考察しようとしたのだと考えることができる<sup>3)</sup>。

#### 4.2 『ディッソイ・ロゴイ』の著者の立場をめぐるこれまでの解釈

以上で、IテーゼとDテーゼの内実が明らかとなった。前号で指摘したとおり、この文書は、弁論術の教育用テキストとして使用されていた可能性が高い。1～4章も、模擬論争のサンプルとして、教育のための暗記用素材という側面を持っていたと考えるのが妥当だと思われる。だが、たとえそうであったとしても、その議論の中に、執筆者のなんらかの立場が反映されていると考えても、なんら不合理なことではないであろう。

じっさい、多くの研究者は、テキストから、著者自身の立場を読みとること

ができると考え、さまざまな解釈を提示してきた。これまで提示されてきた解釈を分類すると、大きく三つのタイプに分けることができる。

**(I) 著者はDテーゼを支持しているとする解釈（反相對主義的解釈）**

これは、多くの研究者によって指示されてきた伝統的解釈である<sup>4)</sup>。その理由は、Dテーゼの議論は、Iテーゼに対する批判として展開されているという点にある<sup>5)</sup>。たしかに、それは事実である。しかし、われわれは、そもそもDテーゼは、Iテーゼが提示された後に、それを受けて提示される議論であるという点に注意する必要がある。すなわち、IテーゼがDテーゼへの批判を含まないのは、たんに、その提示の順番に由来しているだけかもしれないのである。これに対して、Dテーゼは、Iテーゼの提示を受けて提示される議論である以上、Iテーゼへの批判を含むのは当然のことだといえる。このように、DテーゼがIテーゼへの批判を含んでいるという事実は、著者がDテーゼに与していると考えられる理由にはならないのである<sup>6)</sup>。

**(II) 著者はIテーゼを支持しているとする解釈（相對主義的解釈）<sup>7)</sup>**

この解釈は、著者がプロタゴラスの影響下にある相對主義者であるという想定に基づいている。もし著者が相對主義者であったとしたら、著者は、二つのテーゼのうち、相對主義的なIテーゼのほうに共感していると考えるのが妥当であろう。

たしかに、この文書全体に対するプロタゴラスからの強い影響を考えるなら、この解釈は魅力的である。しかし、問題がある。すなわち、もし、著者が相對主義者であり、Iテーゼのほうが正しいと考えているなら、なぜ、二つの対立する議論を併置させているのであろうか。この点を説明できなければ、著者を相對主義者と断定することはできないであろう。

**(III) 著者はIテーゼとDテーゼに同等の説得力を認めているとする解釈**

この解釈では、1～4章の議論が、いわゆる「対立論法（ἀντιλογική）」<sup>8)</sup>に

関係することが強調される<sup>9)</sup>。これは、プロタゴラスに由来する技術と考えられ、ディオゲネス・ラエルティオスでは、つぎのように証言されている。

また、彼〔プロタゴラス〕は、「どんなものごとについても、互いに対立する二つの議論がある」と主張した最初のひとである。そして、彼は、これらを使って、相手に質問を重ねていく議論をおこなったのだが、この方法を使ったのは、彼が最初である。(DK80A1(51))

この証言では、プロタゴラスが、相対立する二つのテーゼを使って、相手に質問しながら、議論をしていたことがわかる。では、1～4章において、二つのテーゼを対置し、議論を展開していく方法は、ここで証言されている方法と同じものなのであろうか。

この問題をめぐっては、われわれは慎重でなければならない。というのも、たしかに両者の方法はよく似ているが、ディオゲネス・ラエルティオスの証言は簡潔であり、ここで証言される対立論法が、具体的にどのような内容を持ち、彼がそれを議論の中でどのように利用したのかや、この方法に従った結果、議論がどのように展開していくのかについては、必ずしも明確ではないからである<sup>10)</sup>。それゆえ、われわれは、1～4章の解釈を提示してから、それがディオゲネス・ラエルティオスの証言とどれくらい整合的なのかを考えることにしたい。

### 4.3 『ディッソイ・ロゴイ』の著者の立場をめぐる私の解釈

以上、(I)～(III)の三つの見解を検討してきたが、いずれも決定的なものとはいえなかった。それゆえ、われわれは、分析の視点を変える必要があるだろう。

そこで、まず見直したいのが、IテーゼとDテーゼの関係である。これまで、研究者たちは、二つのテーゼが論理的に排他的で、同時には成立しないということ、当然の前提としてきた<sup>11)</sup>。だが、それは事実ではない。再解釈された

I テーゼとDテーゼの定式化を比較してみよう。

I テーゼ：限定句を導入した場合に，同一の主語に，対立的な述語が付帯する。

D テーゼ：限定句を導入しない場合に，同一の主語に，対立的な述語が付帯しない。

I テーゼとDテーゼは，限定句を導入する場合と，導入しない場合という，別々の場面に適用される。すなわち，同一の主語に対立的な述語を付帯させるとき，限定句を付加すればI テーゼが真となり，付加しなければD テーゼが真となるのである。

これは，何を意味するであろうか。1～4章における対立的テーゼは，最初の定式化では，対立する二つのものごとが，同一であるか異なるかという，排他的テーゼであった。ところが，それが再解釈されていく過程において，両者の排他的な関係は解消され，矛盾しない関係に変化しているのである。

これまで，対立論法の手法は，たんに，二つの矛盾するテーゼを提示する技術だとみなされるが多かった。だが，このような捉え方には問題がある。というのも，先に引用したDK80A1の証言では，対立する議論の提示は，議論の出発点に想定されており，プロタゴラスは，それらを使って，相手に質問しながら，議論を進めていったとされているからである。一つの問題に対する対立的なテーゼの提示は，議論を立ち止まらせるアポリアではなく，議論を進展させていくためのものなのだと考えられる<sup>12)</sup>。

1～4章において，著者は，二つの対立するテーゼを矛盾したままにせず，再解釈を与えることによって，矛盾しないものに変化させている。それゆえ，もしここで提示されている方法が，プロタゴラスの方法にもとづくものであるとしたら，プロタゴラスの方法は，最終的には，テーゼの対立を解消する方法だったことになるであろう。

そのように考えるとき，著者が相対主義に与しているとする解釈 (II) の可

能性が開かれてくることになる。というのも、結局、Dテーゼからの批判は、Iテーゼの限定句を無視しており、それゆえ、Iテーゼは否定されないことになるからである。すなわち、著者の戦略は、相対主義の立場を擁護するために、それを批判する対立的テーゼを持ち出し、その内実を再解釈することによって、相対主義への批判が成立しないことを示すことだったのだと考えることができるのである。

#### 4.4 5章における相対主義思想

これまで、5章の議論は、その真意が不明であり、1～4章との関連も明確ではなかった<sup>13)</sup>。だが、1～4章の議論の真意を相対主義の擁護と考えることによって、その関連性が浮かび上がるように思われる。すなわち、5章の議論を、相対主義を擁護するための補強的議論として解釈する道が開かれるのである。

5章は、同一のものに矛盾する述語が付帯するという、奇妙な主張から出発する。たとえば、「狂気の人でも正気の人でも、賢い人も愚かな人も、同じことを語り、行う」(5.1)し、さらには、「同じものが、より大きくもあるし、より小さくもある」(5.2)といった具合である。この主張は、つぎのように定式化することができるであろう<sup>14)</sup>。

(I) 同一のものごとSが、Pかつanti-Pである。

これは、Iテーゼにおける限定Lを取り除いたテーゼであり、Dテーゼが、不可能な事態と主張するテーゼである。

つぎに、著者は、そのような主張(I')を述べる人たちは正しくないと言主張する(5.6)。なぜなら、もしこの主張が成り立つなら、「正気の人には気が狂っており、気の狂った人は賢いことになってしまい、すべてが混乱に陥ってしまうからである(5.8)」。すなわち、著者は、相対主義の内実が(I')のようなものだとしたら、それは間違っていることになると言主張しているのである。これ

は、Dテーゼにおける批判と実質的に同じものだと考えることができるだろう。

こうして、Dテーゼに相当する批判を提示した後、著者は、その解決方法を提示する。それは、「適切なときに」「不適切なときに」という限定句を付加することである。すなわち、同じことを語る場合でも、賢い人は、「適切なときに」語り、気の狂った人は、「不適切なときに」語るのであり、この限定によって、両者の間に相違が生まれ、パラドクスは解消されることになる(5.9-5.10)。著者によれば、それは小さな付加であるが、これによって、両者はもはや同じものではなくなるのである(5.10)。

以上の解決方法は、Iテーゼの説明と同趣旨のものだと考えることができる。すなわち、著者はここで、(I')を、限定句の導入によって、Iテーゼに変換することにより、Dテーゼからの批判を回避しようとしているのだと考えることができるのである。

その後、著者は、同様の変化が限定句なしにも生じる例として、アクセントの違いや、短母音と長母音の違い、さらには文字の配置の違いなどによって、単語の意味が変化することを指摘する(5.11-5.12)。著者はこれを、明確な限定句の付加がなくても、限定句が付加される場合と同様に、その実質に違いが生まれる例として紹介している。このような事例を紹介する意図は、限定句がなくてもそのような変化が起こる以上、限定句を付ければ、変化が生じることは明白であることを示すためである(5.13)。このように、著者は、実質の変化を引き起こしている原因は、限定句の力にあることを示そうとしているのである。

最後に、著者は、「同一の人間があるとともにならない」という問題について、「ある観点から(τι)」みた場合と、「あらゆる観点から(τὰ πάντα)」みた場合を区別し、ものごとはみな、「ある観点から」あるのだと主張する(5.15)。ここで著者は、限定句の付加を、「ある観点から」という言葉で表現し、それを、「あらゆる観点から」と対比している。すなわち、ものごとSに特定の性質Pが付帯するのは、つねに特定のひとつの観点からみた場合だけで、他の観点からみれば、それは付帯しなくなるのであり、どの観点からみても必ず付帯するよ

うな性質Pは、存在しないのである。

以上、われわれは、5章の議論を詳細に検討してきたが、その内容は、1～4章の議論と重なるものであることが明らかになった。端的に言えば、5章の議論は、対立論法とは異なる手法によって、相対主義を擁護する議論だといえる。すなわち、1～4章において、著者は、IテーゼとDテーゼの対立の解消というかたちで議論を展開したが、今度はそれを、Dテーゼによる批判を通してIテーゼを正当化するというかたちで展開し直したのである。

#### 4.5 まとめ

以上、われわれは、『ディッソイ・ロゴイ』1～5章において展開されている議論を詳細に分析してきた。以下、その結果をまとめるとともに、その意義を考察しよう。

『ディッソイ・ロゴイ』1～5章は、弁論術の練習用の素材として使われた可能性が高いが、その背後には、たんなる練習用素材を超えた、著者の意図が潜んでいる。それは、一言でいえば、相対主義の擁護と、その理論的正当化である。それを果たすために、著者は、1～4章において、対立論法の方法を借りて、相対主義的立場と反相対主義的立場を対比させ、両者の表面的な対立を、両者の内実を再解釈していくことによって、解消しようとしている。そして、5章において、著者は、1～4章における議論と同じ主張を、今度は別の方法を通して提示していく。著者はそこで、相対主義を理論的に擁護する議論を、より普遍的なレベルから再構築しているのだと考えられる。

このように、『ディッソイ・ロゴイ』の著者は、凡庸であるどころか、きわめて斬新で緻密な方法で、相対主義を擁護しようとしているのだといえる。

そのさい、われわれが注目すべきは、このような著者の相対主義の理論が、プロタゴラスの相対主義の枠を超える要素を含んでいるという事実である。著者は、相対主義の問題を意味論的に考察し、限定句による意味の変化という観点から、同一性をめぐるパラドクスを解消しようとしている。これは、プロタゴラスの認識論的相対主義の中には含まれていない理論的正当化の試みであ

り、著者は、プロタゴラスを超える視点を提示しているといえるのである。

このような新しい視点が、著者独自の視点かは不明である。しかし、それは、すくなくとも、紀元前400年前後の時期には、このような相対主義の理論化が進行し、一般化していたことを示すものといえるのではないだろうか。

## 5 『ディッソイ・ロゴイ』における言葉と真理

4章では、偽なる言明と真なる言明が、同一のものであるか、異なるものであるかが論じられていた。そこでの議論の意図は、すでに詳しく検討したが、4章では、相対主義の問題以外に、真理概念をめぐる重要な問題が論じられており、そこで示されている発想は、この時代の真理概念を考えるうえで重要な意味を持っている。以下、二点にわたって考察しよう。

まずは、ここに登場する「言明 (λόγος)」の概念である。

ロゴスは、当時の哲学において非常に重要な概念であり、自然哲学ばかりでなく、ソフィストの思想においても、重要な役割を果たしている。ソフィストの思想においては、ロゴスとは、主として、議論や演説における語りを意味し、話者の語る音声として理解されるのが普通である。

一方、『ディッソイ・ロゴイ』での議論においては、「同じロゴス」という表現が登場し、その同じロゴスに、いかなる仕方で真偽が付帯するのかという論理的な問いが発せられ、理論的に考察されている。もし、ロゴスが、個々の話者の発する音声であるとしたら、ロゴスは物質的・感覚的なものであり、一種のトークンであることになる。しかし、『ディッソイ・ロゴイ』の議論では、同じロゴスが、発話者の違いによって、真にも偽にもなることが認められているのである。すなわち、4.4で語られる思考実験によれば、著者を含む複数の話者が「私が入信者です」と言ったとしても、全員が「同じこと」を言っているにも関わらず、(じっさいに入信者である) 著者だけが、真実を述べているのである。このとき、複数の話者が、「同一のロゴス」によって語っている「同じこと」を、たんなる物理的な音声と考えることは難しい<sup>15)</sup>。それぞれの話者のロゴスは、音声として捉えたときには、明らかに異なるものだからである。

このことは、ここで語られているロゴスが、感覚的な音声を超えた「命題 (proposition)」として理解されている可能性を示している。この場合、著者の語っているロゴスとは、音声ではなく命題であり、真偽が付帯するのも、音声ではなく、命題だと考えられていることになるだろう<sup>16)</sup>。

つぎに取り上げたいのは、紀元前五世紀には見られない、新しい真理観である。著者によれば、言明が語られるとき、もし言明で述べられた通りのことが起こったなら、その言明は真となり、もし言明で述べられた通りのことが起こらなかったら、言明は偽となる(4.2)。この真偽の規定は、明らかに、対応説的な真理観に基づいているといえる。

言明と世界との対応関係によって言明の真偽が決定されるという発想は、紀元前五世紀以前の伝統的な真理概念では一般的なものではなく、むしろ、アリストテレスの真理概念に近いものである。アリストテレスの場合、「あるものを、ないと語ったり、ないものを、あると語ることは偽である。あるものを、あると語ったり、ないものを、ないと語ることは真である」(*Met.* 1011b26-27.)とされ、「あるもの」「ないもの」と、語りの内容との一致によって、真偽が規定されている<sup>17)</sup>。『ディッソイ・ロゴイ』の真理観は、このような、紀元前四世紀において標準となる真理観の萌芽として理解できるだろう。

われわれは、このような真理の定義をすることによって、著者が虚偽の成立を明確に認めている点に注目すべきである。このような定義を前提としない紀元前五世紀においては、虚偽の成立は不可能であるという考え方が存在しており、ソフィストたちの中には、虚偽不可能論の立場に立つ者が存在していた。この点においても、著者は、紀元前五世紀の文脈から外れ出していると評価することができるであろう。

さらに注目すべきは、著者が、言明に対する真偽の付帯という現象に、理論的な説明を与えようとしている点である。著者は、1～3章における「よい」や「美しい」や「正しい」などの形容詞の述定と、「真である」「偽である」という述定を区別しており、後者に対しては「伴う (*παρή*)<sup>18)</sup>」(4.5)とか、「混ぜ合わさせる」(4.9)などの特殊な言い回しを採用している。著者が、こうし

た特殊な言い回しをするのは、命題と真偽との関係が、ものとその性質との関係とは異なるということ、自覚していた証拠といえるだろう<sup>19)</sup>。

## 6 結論

以上、われわれは、『ディッソイ・ロゴイ』の議論を詳細に分析してきた。最後に、その結果をまとめ、この文書が持つ重要性を指摘することにした。

まず、明らかになったのは、この文書が、これまで信じられてきたような凡庸なものではなく、さまざまな新しい視点を提示しているということだ。

本文書の前半で提示されている対立論法という方法は、たんに、問題に対する正反対のテーゼを提示するだけの技術ではなく、対立を解消する方向に向かおうとするものであった。本文書の議論は、そのことを具体的に示している。

こうした方法にもとづいて、この文書では、相対主義的な立場が打ち出されていると考えられるが、その相対主義の理論は、プロタゴラスの焼き直しではなく、新たな理論的考察を含むものであった。すなわち、それは、相対主義の意味論的な考察と理論化であり、紀元前400年前後には、相対主義の理論が、このようなかたちで理論化へと向かっていたことがわかる。

こうした認識論・意味論における議論の進展は、紀元前五世紀には見られない新しい真理論を生み出すことになった。4章の考察で明らかになったように、そこでは、紀元前四世紀以降に登場する命題や真理をめぐる発想が、萌芽的に登場しており、この時期には、すでにそのような新しい理論的枠組が登場していたことを示している。

以上のような、紀元前五世紀にはない新しい側面が登場する一方で、この文書には、紀元前五世紀の思想の強い影響が認められる。2章で挙げられる民族学的な文化相対主義の提示は、この文書が、いまだ紀元前五世紀の問題関心の中にあることを示している。

また、ソフィストたちからの強い影響も、この文書の特徴であった。とりわけ、6章以降の多様な議論は、いずれも紀元前五世紀の典型的な議論であり、さまざまなソフィストの影響がうかがえるものである。これは、紀元前400年

前後においても、ソフィストたちの強い影響が存在し、また、ソフィストたちの提示した問題が、共通のトポスとなって、盛んに議論されていたことを示している。

このように、『ディッソイ・ロゴイ』は、紀元前五世紀から四世紀への移行期における思想的状況を保存した文書である。それは、これまで、断絶的に理解されることの多かった二つの世紀の思想が、じつは連続的であったことを示している。この文書は、紀元前五世紀の「ソフィストの世紀」と、紀元前四世紀の「哲学の世紀」のあいだをつなぐミッシング・リンクとして、きわめて大きな歴史的意義を持っているのである。

本研究は JSPS 科研費25370036 の助成を受けたものです。

#### 文献表

- Bailey[2008] Bailey, D. T. J., 'Excavating *DISSOI LOGOI* 4', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 35 (2008), 249-264.
- Barnes[1979] Barnes, J., *The Presocratic Philosophers* (Rev. ed.), Routledge & Kegan Paul, 1979.
- Boot[1982] Boot, P., 'The Philosophical Position of the Author of the *DISSOI LOGOI*', *Philosophical Inquiry* 4 (1982), 118-123.
- Burnyeat[1998] Burnyeat, M. F., 'Dissoi Logoi', *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, Vol.3, 1998, 106-107.
- De Romilly[1992] De Romilly, J., Lloyd, J. (tr.), *The Great Sophists in Periclean Athens*, Clarendon Press, 1992.
- Dillon-Gergel[2003] Dillon, J., and Gergel, T., *The Greek Sophists*, Penguin, 2003.
- Dupreél[1948] Dupreél, E., *Les Sophistes*, Neuchâtel, 1948.
- Goldin[2002] Goldin, O., 'To Tell the Truth: *Dissoi Logoi* 4 and Aristotle's Responses', in Caston, V., Graham, D. W. (edd.), *Presocratic Philosophy*, Ashgate, 2002, 233-249.
- Gomperz[1912] Gomperz, H., *Sophistik und Rhetorik*, Teubner, 1912.
- Guthrie[1971] Guthrie, W. K. C., *The Sophists*, Cambridge University Press, 1971.
- Kerferd[1981] Kerferd, G. B., *The Sophistic Movement*, Cambridge University Press, 1981.
- Kneale & Kneale[1962] Kneale, W., Kneale, M., *The Development of Logic*, Clarendon Press, 1962.
- Kranz[1936] Kranz, W., 'Die Sogenannten *Δισσοί λόγοι*', *Hermes* 72 (1937), 223-232.

- Levi[1940] Levi, A., 'On "Twofold Statesments"', *American Journal of Philology* 59 (1940), 292-306.
- Mendelson[2002] Mendelson, M., *Many Sides: A Protagorean Approach to the Theory, Practice, and Pedagogy of Argument*, Kluwer Academic Publishers, 2002.
- Robinson[1979] Robinson, T. M., *Contrasting Arguments: An Edition of the Dissoi Logoi*, Ayer, 1979.
- Robinson[2001] Robinson, T. M., 'The Dissoi Logoi and Early Greek Skepticism', in Preus, A. (ed.), *Essays in Ancient Philosophy VI*, SUNY, 2001, 187-197.
- Scholz[2003] Scholz, P., 'Philosophizing before Plato: On the Social and Political Conditions of the Composition of the *DISSOI LOGOI*', in Detel W., Becker, A., Scholz, P. (edd.), *Ideal and Culture of Knowledge in Plato*, F. Steiner, 2003.
- Taylor[1911] Taylor, A. E., *Varia Socratica*, James Parker & Co., 1911.
- Untersteiner[1954] Untersteiner, M., Freeman, K. (tr.), *The Sophists*, Basil Blackwell, 1954.

注

- 1) これは、4章においては、多少事情が異なる。すなわち、そこでは、「真なること」と「偽なること」ではなく、「真なる言明」と「偽なる言明」の同一性が主張されているのである。しかし、このような変則的な表現となっているのは、4章では、真と偽が付帯する主語となるものが、その性質上、「言明」のみに限定されるからであると考えられる。じっさいに4章で主張されるIテーゼは、「同一の言明が、あるときには真であり、あるときには偽である」という表現をとっている。
- 2) 著者は、人や物などの物理的なものと、行為などの非物理的な事態を区別せずに議論しているように思われる。ここでは、そのような主語になりうるものを総称して「ものごと」と呼ぶことにする。
- 3) 私と同様の視点を、Robinson[1979] 75が提示している。Robinsonは、同一性言明と、より穏当な述定的言明の区別を提示し、著者がそれに気づいていると考えている。これに対して、Boot[1982] 120-121はRobinsonを批判し、両者の区別は現代的なもので、アナクロニズムを犯していると批判しているが、古代の哲学者がそのような発想を萌芽的に抱いていたとしても、なんの問題もないであろう。
- 4) Gomperz[1912] 191-192, Levi[1940] 296-297, Dupleél[1948] 206, Untersteiner[1954] 304-308, Barnes[1979] 516-522.
- 5) たとえば、Barnes[1979] 516-522は、著者が相対主義的立場を *ignoratio elenchi* によって批判していると解釈している。また、Boot[1982] 120-121は、4章における批判が「ペリトロペー」であるという理由から、伝統的解釈を支持している。
- 6) 伝統的解釈については、Robinson[2001] 191ff. が詳しく批判している。
- 7) Gomperz[1912] 162-163, De Romilly[1992] 98, 112-3.
- 8) 対立論法 (*ἀντιλογική*) は、紀元前五世紀において、ソフィストの影響のもとに広まっ

たと考えられる議論の方法であり、エウリピデスやトゥキュディデスなどにその影響を見ることができる。それは、ソフィストの代表的な議論の技術とみなされることが多いが（cf. Plato, *Soph.* 232b6）、その内実は不明瞭であり、その具体的な姿は、かならずしも一様ではなかったと考えることができる。プラトンは、この技術の狭義の意味として、演説形式ではなく、特定の相手に対する一問一答の問答による議論の方法を挙げている。さらに、*Phaedr.* 261c-eでは、この技術は、同じ事柄を反対のものに見せる技術とされている。

- 9) Gomperz[1912] 168-171, De Romilly[1992] 76-77, Goldin[2002] 234, Mendelson[2002] 85, 109-110. なお, Dillon-Gergel[2003] 319は『エウテュデモス』との関連を指摘している。
- 10) プロタゴラスの対立論法については、他にもクレメンスやセネカによる証言（DK80A20）があるが、同様にあいまいである。
- 11) 例外は Burnyeat[1998]。
- 12) Kerferd[1981] 65-6は、対立論法と、ソクラテスのエレンコスとの類似性を指摘している。しかし、エレンコスにおいては、対立的テーゼへの到達は議論の終着点であり、そこには行き詰まり（アポリア）が待ち受けているのに対して、プロタゴラスの対立論法では、対立的テーゼは、議論を進展させるためのものである。この点で、両者は、まったく異なる方法だと考えるべきである。
- 13) 5章の議論は、6・7章の議論とまとめて、一つのグループと見なされることがある。たとえば、Kranz[1936]は、「語る（λέγοντες, λέγοντι, λέγεται）」という共通の表現が登場するという理由で、5～7章を一つのグループにしており、Scholz[2003] 203も同様の見解を取っている。だが、内容的な観点から見れば、5章はむしろ1～4章に近く、6・7章との関連は薄いと考えられる。
- 14) 「狂気の人でも正気の人でも、賢い人も愚かな人も、同じことを語り、行う」という主張は、「同一の発言や行為が、狂気の人（愚かな人）のものでもあり、かつ、正気の人（賢い人）のものでもある」と書き直すことができる。
- 15) 同一性ということで、著者が単なる物理的・感覚的な類似性以上のことを考えていたことは、4.5において、同一性の例として、「人格の同一性」が持ち出され、ひとは、時期によって子ども、青年、成人、老人と変化するにも関わらず、同一の人間だと述べられていることからわかる。cf. Bailey[2008] 255-257.
- 16) cf. Bailey[2008] 251. また、Kneale & Kneale[1962] 16は、ここでの議論を、ストア派の φώνη と λεκτόν の区別のさきがけとして捉えている。
- 17) アリストテレスの規定は、プロタゴラスの人間尺度説の規定に類似していると思われるかもしれない。じっさい、プラトンは、『テアイテトス』において、人間尺度説を真理の理論として提示し、批判している。だが、われわれは、人間尺度説を真理の理論であるとするに慎重でなければならない。じっさい、そのような解釈は、プラトンによって生み出されたものであり、プラトンはすでに、紀元前四世紀における対応説的な真理観を通して、人間尺度説を解釈しているからである。

- 18) この言い回しは、プラトンのイデア論におけるパルーシアの理論との関連が指摘されてきた。Taylor[1911] 109, Goldin[2002]。だが、この表現をプラトンの影響と考える必要はない。なぜなら、ここで提示されている発想は、萌芽的なものにすぎず、もし彼がプラトンの理論を知っていたら、より明確な議論を提示していたはずだからである。Goldin[2002] 237が指摘するように、これは、プラトンの形而上学のイデアの萌芽となる発想が、すでに紀元前400年前後には登場しており、プラトンのほうがその影響を受けたということを示唆しているように思われる。(もっとも、これは、本文書がプラトンに影響を与えたことを意味するものではない。プラトンの理論は、ソクラテスを中心とするこの時代の論争の延長線上に理解されるべきものである。cf. Robinson[1979] 192-3.)
- 19) ここで提示されるような、同じロゴスに真と偽が付帯するというパズルは、アリストテレスによって解決されるに至ったという解釈を、Goldin[2002] が提示している。